

[Aさんの旦那さんの言葉]

地震が起きたとき、必ず津波が来ると確信した。普通の揺れではなかった。まず、思ったのが「これでは仕事ができないな、どうしよう。借金が払えない」だった。

自宅の片づけは心も体もとても疲れた。津波の強さは本当にすごい。どっから手をつければいいのか分からない状態だった。

今では「とっておけば良かった」と思えるものもあの時はかなり捨てた。火事場の馬鹿力というものなのか重いもの（冷蔵庫など）をひとりで持って投げている。ぶち切れていたんだと思う。震災当初（3月～4月）はボランティアさんがいなかった所以我们たちでやっていた。本当に大変な作業だった。ボランティアさんがいたら頼んでいたよ。2か月で5kgは痩せた。

仮設は狭くて、体が痛くなる。壁は薄いので隣に住んでいる人にも気を使う。プライベートもない。

[お二人の今現在]

- ・家がある人（直した人）とない人との関係が良くない。
溝がさらに広がる時期に来ている。温度差がありすぎて、どうしたらいいかわからない。
- ・ローンがなかったらこの地から離れていた。地元という意識はもうない。
- ・職人さん（建具屋）がいなくて4月末までに自宅が生活できるレベルに達するかは未定。
- ・海が近くなるために地震やサイレンに敏感になるだろう。津波が来る夢は未だ見る。
- ・当初は助け合いのムードだったが、今は悪い意味で「震災前に戻っている」
- ・ボランティアさんとの手紙のやり取りができています。ボランティアさんは私たちが出来ないことをしている。来てくれるだけでもありがたい。

[皆さんに伝えたいこと]

- ・地震 = 津波と頭に入れておく。
- ・津波が来たら家には戻らないこと。
- ・家族の集合場所を決めておき、助けに行かない。まずは自分の命を守る。
- ・車にある程度のものは積んでおいた方がいい。(若干の現金、水、ガソリン、乾電池、ゴミ手袋、ビニール袋、タオル、新聞紙、ラジオ)
- ・大金は銀行に預けること。タンス預金はあまりよくない。
- ・一番大変だったのが、「水」がなかったこと。
- ・平常時の人間関係（隣近所、地域との付き合い方で震災時、その後もかなり違う）

「ボランティアさんに本当に感謝している」、「ボランティアさんがこの頃見えなくなって寂しい」、「一人ひとりの復興のスピードの違いがはっきりしている」
このような声も出てきています。

時の流れとともに、現場の課題も移り変わっていきます。

「今更ボランティアなんて・・・」

「今更」なんて言葉はありません。

「早くボランティアに来たから偉い」

そんなことはありません。

被災地の「今」に住民の皆さんに寄り添いながら取り組めばいいと思います。

レスキューストックヤードは来年度も七ヶ浜町に常駐スタッフを置き、これからも七ヶ浜町を応援する所存です。

そのためには皆様のお力添えがこれからも必要です。今後ともよろしく願いいたします。